

STS Network Japan 第3回定例研究会 p.2

技術との付き合い方：
障害を持った医師として 熊谷 晋一郎 p.3

"Technology of the Body" Rita Kuhlmann p.9

モード論の隠れた社会的機能：その1 木原英逸 p.11

研究会情報 p.13

NEWS LETTER

2003 VOL.14 No.4

STS NETWORK JAPAN

STS は、Science, Technology, and Society の略称です

STS Network Japan 第3回定例研究会

日時：2004年5月21日（金）18時～

会場：東京大学先端科学技術研究センター 13号館2階209号室

（最寄り駅：小田急線・東北沢駅より徒歩7分、井の頭線・駒場東大前駅より徒歩10分。

詳しくは以下をご覧ください。）

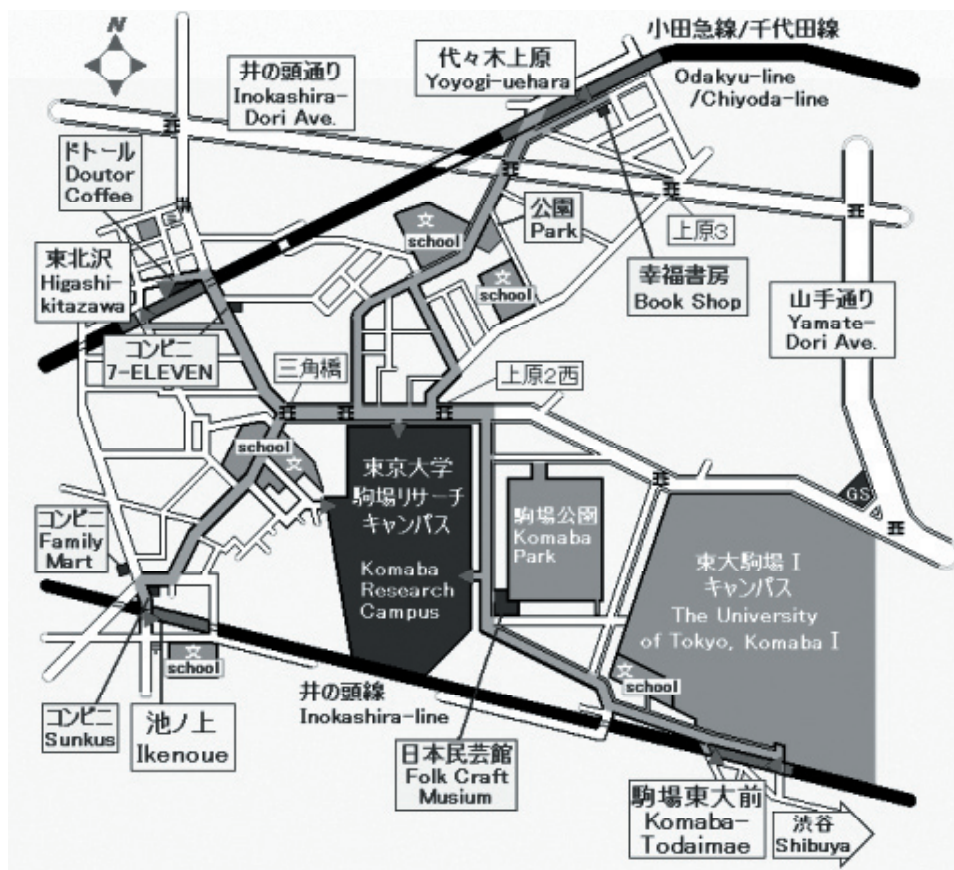
報告者：田口亜紗氏（成城大学大学院文学研究科博士課程）

報告タイトル：生理休暇の誕生—近代日本の月経と生理休暇要求の言説史

早くも3回目を迎える定例研究会では、昨年、修士論文の成果を『生理休暇の誕生』（青弓社、2003年）にまとめられた田口亜紗さんに、同書の議論をもとに報告していただきます。

生理休暇は、敗戦直後の1947年に制定された労働基準法のもとで制度化され、世界的にも初めての日本独自の試みとして導入されました。田口氏によれば、そのような生理休暇制度の成立は、近代日本がおかれた歴史的、社会的状況において、さまざまなベクトルのせめぎあいのなかで実現したものでした。『生理休暇の誕生』では、近代日本において女性の身体が西欧医学のまなざしのもとへと包摂されていく過程と、他方で女性労働者たちがそのような身体の「医療化」言説を流用しながら過酷な労働条件を向上させるためのたたかいを繰り返していく過程が交差する地点において生理休暇制度が誕生していく過程が、実に鮮やかに描かれています。

今回の報告では、近代日本における生理休暇の制度化を題材に、より広範な議論へとつながるさまざまな論点が提示されると思います。みなさまのご参加をお待ちしています。



技術との付き合い方

—障害を持った医師として—

熊谷 晋一郎

千葉西病院医師（小児科）。1977年、山口県生まれ。95年、東京大学理科一類入学。97年、医学部医学科に進学し、2001年に卒業。東大病院、千葉西病院での研修を経て、2003年より現職。出生時に新生児仮死で脳に障害を負い、小児麻痺に。車椅子に乗った医師として、子供たちを相手に毎日の診療活動を行っている。

STS Network Japanでは、2002年12月、「ユニバーサルデザインの可能性」と題して、近年、大きな注目を浴びているユニバーサルデザインをめぐってシンポジウムを企画しました（その報告は本ニュースレター48号（2002年）に掲載されています）。

当日、報告が予定されながらも、諸般の事情で参加が適わなかった熊谷さんに、今回、インタビューというかたちで、シンポジウムのテーマであるユニバーサルデザインについて、障害を持った医師の立場から考えていることについて語ってもらいました。そこでは、ユニバーサルデザインのみならず、テクノロジーというものを考える上で非常に重要ないくつかの論点が、日常の経験に根ざしたかたちで語られています。

「障害」を実感する

障害ということを考える上で、これまでの27年間を通して、二つのピークがありました。そもそも18歳のときまでは、障害という問題を一度も考えたことがなかったといっても過言ではありません。全部、身の回りのことは親にやってもらっていたということもあり、実は「障害者」ではなかったというか、日常生活では不便を感じることなく暮らしていました。やりたいことだけやっていたわけです。

それが、18歳をすぎて一回目のピークを迎えます。大学に入学し、故郷の山口を離れて8畳部屋で一人暮らしをはじめました。そのとき、障害というのをはじめて考えることになります。そして二回目のピークは医者になって一年目のときです。結論を先に言ってしまうと、幸いなことに、障害に対する見方はその二回であまり変わりませんでした。まずは、そのことについて話したいと思います。

一人暮らしをはじめ

一回目のピークを迎えたのは18歳のとき、東京で一人暮らしをはじめたときですが、その前後で一つ、大きく違うのは、18歳までは漠然とした「不安」があったんですね。この先、自分はどうなってしまうんだろう、という不安です。そのときは親に頼りきって日常生活を送っていました。ですので、親が倒れたときに、自分のはたれ死んでしまうんじゃないか、という漠然とした不安を抱えていました。親がいなくて、送り迎え、着替え、移動、なにひとつできない状況にありました。そういう状態で、実際に、自分に何ができて何ができないかさえ分からない。だけれども不安がある。そのような状況におかれていたわけです。

それが、18歳を境に一人暮らしをはじめた瞬間に、不安というより課題が目の前に連なって現れてきました。たとえばぼんと一人暮らしをはじめて、その部屋に一人置かれたとき、はじめて気がついたわけです。自分はトイレが

できないんだ、とか、自分は風呂ができないんだ、ということに。その前に気づけよと思うかもしれないけれど(笑)、そこではじめて気がついたんですね。すぐ近くに差し迫った問題として。そして次々に、具体的な課題が目の前に広がってきました。

それまではなにが課題なのかすら分かっていませんでした。荒野みたいな状態だったわけです。そのために不安になっていたわけです。

それが、一人暮らしの生活をいざ始めてみると、アスレチックのような感じで、一歩踏み込んでみると具体的な、一つ一つ解決すべき課題がそこにはあった。そして、不安というより、やらなきゃいけないという感じに変化してきました。なにかを恐れているけれど、その対象がはっきり明確につかめないから不安になるんですね。予期できない恐怖です。だけど、実際に具体的な課題が目の前にワッと来ると、不安というよりは、やるしかないっていう感じになってきました。

でも、あまりにたくさん課題がある場合は、どうしても優先順位をつけてこなしていかななくてはなりません。自分の場合は、トイレを解決しなければいけない、お風呂を解決しなければならない、という課題が出てきました。それらの課題を一つ一つ解決していく。そうやって一個ずつやっているうちに、なんとか生活が見えてくる、固まってくる、というふうに感じてきました。

研修医一年目の頃

そして24歳のときに研修医になるわけですが、やっぱり医者になったときも、実際に医者としての毎日が始まってみるまでは不安でした。医者っていうのは、実際のところ、どんなことをする職業なのか分からないわけですよ。そのため、とにかく不安な状況でした。

でも逆に、いったん、医者になってみると、不安がなくなる代わりに課題が出てきました。そして、優先順位をつけて一個ずつやっていくわけです。あえて一人暮らしをはじめたときとの違いを言えば、一人暮らしのときは自分のためにやっていたけれど、医者になると優先順位の付け方が患者中心になります。そういうことで、優先順位のランク付けがちょっと違ってきました。これは職業一般についていえることだと思うんですが、仕事優先というか、仕事

の結果、クオリティをどれだけ高くするかということを中心にしなさいといけないということになってきます。そこが違うのかなと思います。

そのなかで、テクノロジーがどういう意味を持っていたかということなんですけれど、さまざまな技術は問題解決をする上ではものすごく役立ちますよね。課題が次から次へと襲ってくるから。たとえば移動に障害があれば電動車椅子というのがあるわけですし、あるいはトイレでお尻が拭けなければウォッシュレットを使う、とかそういうことです。

医者の場合も、送管機という道具があります。喉に管を入れなきゃいけないときに使う器具で、かなり特殊な装置なんですけど、僕の場合、手に力が入らないので、麻酔科医が使っているような送管機を使って送管しています。

ただもう一ついえるのは、テクノロジーっていうと機械のような感じですけど、もう少し広くシステムっていうものを考えることができるんじゃないかと思います。たとえば処置をするにしても、ついてもらう看護婦さんを確保するとか。医療自体が一人じゃできないので、自分になにができてなにができないのかを周りの人たちに知ってもらって、うまく周りとかみ合っていくことが大切になります。そういう意味では、課題をこなす上で必要な問題をテクノロジーだけで解決しようというのは難しいと思います。

さらに実際問題としては、自分がどういうテクノロジーを使うのかを知ってもらう、ということが大切になってきます。仕事一般でそうだと思うのですが、一人じゃできないから、周りとの連携が必要になってくるわけです。だから、この医者はこういうふうにして送管するんだということを、周りにある程度知ってもらう。それで、必要な手立てが出せるように認知してもらわないとやりにくいわけです。

その際、僕自身が障害を持っているっていうことがどういう意味を持ってくるのかということなんですけど、根本的なところではそんなに変わらないと考えています。どの医者にも癖があるので、ある意味、みんな関わり方は違います。たとえば看護師が医者の補助をするときであれば、その医者の癖を把握していて、普段のその人のやり方にあったかたちで補助するわけです。それが僕の場合は極端端というだけだと思います。他のドクターが使わないような器具を必要として診療していますから。だから、そのことを知らない人の場合、やりづらいところがあります。でも

逆に、自分のやり方を周りに認知してもらって、伝えていけば、そんなに苦ではないと思うんですね。重要なのは、仕事とか、全体が有機体として動いていく場では、個々人の癖、特性を周りが理解して尊重することで、本人の実力が発揮できるということではないでしょうか。

患者に責任を持つということ

さっき言った優先順位のことなんですけれど、優先順位を付ける背後には価値観があります。たとえば自分が医者になって一年目のときと二年目で大きく違ったのは、優先順位が大きく変わったということがあります。

一年目は、採血や基本的な手技(しゅぎ)、一つ一つの技、採血をうまくやるとか、だれでもそうなんですけど、みんなやっきになるんですよ。一つ一つの技術を身につけることに。自分もその例にもれなくて、技術的にきっちりするっていうことを、優先順位の上のほうに持ってきていたことがありました。そのぶん、患者に責任を持つという、もうちょっと大事なところが抜け落ちていました。うまく採血をしても、患者に責任を持っていなかったら、ずれてくるんですよ。その患者を直すとか、その患者をよくするというところに重きを置いていなくて、うまく採血する、それ自体が患者にとっていいことなんだっていうのでは、もうちょっと大事な、優先順位で上に来るべきものが欠けてきます。それで結構、鬱々としていたというか。技術的には自分はあまりうまくできない部類に入っていたんですね。そこを自分の優先順位のなかで高くに位置づけていた時期でした。

それが二年目に入って、実はそういう技術的なところはあまり大差ない、人によってそんなに差が無いんだということが分かってきました。そんなにやっきになることではないんだと。それが、医者としての仕事に慣れてきて、だんだん分かってきたわけです。本来の優先順位で上にくるべき、医者として患者に責任を持つということが、もっと大事なんだということが。

だれしも、自分にはできないことがなにかあるんですね。たとえば内科医にはオベができません。だけれど、自分にできないっていうことは恥ずべきことではありません。恥ずべきなのは、患者にとって必要なことを、たとえば自分がすべてをやりたいからというようなことで疎(おろそ)かにすることです。そうではなくて、自分ではできないけれど、

患者にとって必要なことは、誰かを探してやってもらおうということが、当たり前だけれど大事なことです。そういう当然のことが、手技に走ってしまうとできなくなってしまう、見えなくなってしまう。自分ではできないかもしれないということが思い当たらなくなってしまうのです。そのことに、二年目になって優先順位が大きく変わるなかで、はたと気がつかされました。

膨れ上がった「百円ショップ」のテクノロジー

医者になってから、これまで、治療の際に使うさまざまな道具を自分で作ってきました。一年目、技術が自分のなかで優先順位が高かったときには、何十種類もそのような道具を作ったんですね。採血をもっとうまくしなくちゃいけないってことで、特殊な変な箱を作って、「自動採血機」とか。夏休みの工作のような感じで、百円ショップでいろいろ買ってきて(笑)、抱えきれないほどの道具をいっぱい作りました。そういう意味で、技術にまみれていたんですね。全部、手作りですけれども(笑)。つまり、全部、自分ひとりでやらなくちゃいけないと思っていたわけです。そういう風に自分に言い聞かせていたわけです。優先順位からすると、それがすべてであると。一年目は、本当にたくさん、変な道具がありました。しかもそれをいつも持ち歩いていた。

それが二年目になると、さっきお話ししたように、自分のなかで、そういう技術的なものは優先順位からするとかなり下になってきました。みんなと足を揃えとか、みんなと同じようにできる、とかいうようなことです。もちろん、技術が大切なことには変わりありません。けれど、採血であれば、だれか一人、看護師を捕まえて患者の手を押さえてもらえれば、なんとでもできるんですよ。当たりのことなんですけれども。あるいは自分が調子が悪いときであれば、だれかに代わってもらうことでその場をしのげる。しかも、自分がやること、自分が周りと同じようにできるということは、ぜんぜん、大事なことじゃありません。

もっと言うと、技術っていうのはそもそも、みんなばらばらなんですよ。だれでも得意、不得意があります。外科医はこういう技術が得意だけれど、こういうことはできない、とか。内科医はこういうことはできるけれど、こういうことは不得意だとか。それが、みんなと同じように、足を揃えるように努力しようとする、膨れ上がるんですよ。百円ショップのテクノロジーが(笑)。

道具との付き合い方

だけど、二年目に入ると、どんどんシンプルになってきました。道具がもうほとんどいらなくなってきました。そのころ作った道具は、いまやほとんどなにも残っていないんですよ。あえて言うならば、口の中を開けて見る機械があります。口の中をあーんって開けて中を見るための器具です。普通は左手で舌を押さえて、反対の手でライトを持つんですが、僕の場合それがうまくいかないので、口の中を見る器具がライトと一体になっています。それはいまでも役に立っています。別になくてもなんとかなるんですが。

そういう風に、あまりものがなくなってきました。むしろ、優先順位からすると、医者としての仕事、患者が困っていてそれを解決することに専念したい。その手段は自分が実際にそれをやれるんだったらやるし、やれなかったら誰かに頼めばいいんだっていう、きわめてシンプルで、きわめて当たり前のことに思い立ったんですよね。逆にそういうスタンスを周りも理解してくれるんですね。

採血についていえば、いまは僕はうまいほうだと思うんですよ。だから看護師さんは、「採血は先生に任せられる」と言ってくれます。そして、たとえば応急処置が必要になったときは、「先生、だれか呼びましょうか」と言ってくれるわけです。そういうかたちで、自分の状況を周りが理解してくれるような環境にあれば、自分の優先順位からして上のほうにある、医者としての仕事に専念してやれるんですよね。そのことに気がついたのが、一年目のときとの大きな違いだと思います。

道具の数が極端に減ってきたということが、象徴的です。それで、どっちかといえば、いまのほうが100倍、楽です。周りも楽ですよ。それに失敗も少ない。実際の患者の満足度もぜんぜん違います。そういう意味では、あらぬ優先順位をつけられることによってふくれあがる技術、かさばっていく技術というのがあるんだと思います。

一般化して言えば、のきなみ、人を人並みに、という思想で作れば技術は膨れ上がると思うんですよ。はたしてそれがいいことなのか。なかば焦燥感を覚えながら、技術に頼ろうとする、すべて一人で行えるようにする。そういうことだと、人間の数ほど技術は必要になって、すごく膨れ上がる、かさばっていくことになります。だけど、人と人との関係ということであれば、有機体としてその人の癖を

周りが理解しあうことで、互いに補い合うことができるし、そして「浮かない」んですね。職場のなかで。むしろこう、みんなで均質化しようとやっきになっているときのほうが、自分のなかでも浮ついている、方向性を見失っているという気がします。

もし一年目のときの優先順位のまま自分を突っ張らせていたら、破綻していたと思います。そこで止まっていたような気がします。

野戦病院のような忙しさのなかで

では、なんで優先順位を見直すきっかけがあったのかということなんですが、ここが面白いと思うんですが、大学病院と民間病院の違いがあると思うんですね。これ、オフレコでいいんですけど(笑)。一年目は大学病院で、二年目は民間病院でした。野戦病院のようなところですよ。千葉西病院に行く前は、忙しいから大丈夫かなあと思ってはいたんですが、忙しいと助け合うことが自然なんですね。要するに、とても一人じゃこなせる量じゃないわけです。

大学病院っていうのは、それと比べると孤独というか、基本的に一人一人の仕事の負荷はすごく小さいんです。だから研修医を鍛えるためには一人でやらせる、そういうことのほうが重要視されてしまう。そういう違いがあると思います。

だけど民間病院のよさでもあり悪さでもあるのは、とにかく激烈に忙しいんですね。夜中200人の患者を診ているところに、救急車で重態の患者が運ばれてくるっていう、ありえないような忙しさです。そうなる则ち一人ではとても手に負えないわけです。そういう環境のなかでは、自分ひとりでは何もできないってことを、だれもが身をもって知っています。だれかにお願いしなくちゃとても一人ではできないって、みんなが思っているんですね。しかも、あの先生は呼んでも来ないとか、あの先生はいったん寝ると起きないとか、そういうそれぞれの癖をみんな把握しているんですね。あの人は縫うのがうまいとか、そういうことをみんなが熟知しているわけです。本当に忙しいがゆえに、有機体として動いている。そういうなかで動いていると、多少、障害があるといことすら個性の中に埋没してしまします。とても一人ではできないという意味では、みんな障害を持っているようなものです。

だから逆説的に、忙しすぎる病院というのはよかったです。そこではじめて、優先順位が自然に変わっていききました。一年目は、一人でやることにしか意義を見出すことができませんでした。医者としての判断をするのは、はるか上のほうの先生で、ある種の命令系統があって、その通りにする、そういうことで、医者としての意思決定というところには直接、関与しませんでした。その結果、自分のなかで優劣の順位を付けても、それは技術的なものにしかなくなってきませんでした。それが、民間病院に移ってくると、猛烈に忙しくなります。そうすると、医者としての仕事を始めなくちゃいけなくなります。そういう環境におかれて、優先順位ががらっと変わって、膨れ上がったテクノロジーが小さくなっていった、っていう感じです。

そして、一度、そういう経験を経しまうと、今度また国立病院に行ったとしても、一年目よりはまともにやれると思います。要するに、自分のなかでの問題だと思うんですね。価値観とか。一度、そういうものが分かれば、どこに行ったとしても価値判断は揺るぎません。一人でやることにあまり意味を見出さないだろうし、逆にそのような振る舞いをしているから、周りもそれを理解してくれる、尊重してくれるんじゃないかと思います。

自分を知るための一年

じゃあ、その膨れ上がったような技術が無駄だったかという、そうでもなくて、そのなかから少数は残っている技術があります。少なくともはりましたし、いらないものもあったんですけど、一部は残ったわけです。

だけどそれよりも重要なのは、多分、あの時期を通らないと納得できなかったんじゃないかと思います。自分がどこまでできるか見定められなかったんじゃないかと。だから、あれを抜きにいきなり、医者としての仕事に専念しろと説教されても理解できなかったんじゃないかと思います。

周りに理解してもらおうとか、周りと有機的に結びつくとかいったときに、その大前提として、自分で自分を理解しないといけない、ということがあります。自分は果たして、なにがどこまでできるのか、と。自分で自分を理解していないと、周りに理解してもらうことは無理です。自分はこれができるけれど、これができないというようなことを、明確にしておく必要があります。そういう意味では、研修医

の一年目は、自分にはどの程度までできるのか、それを知るための貴重な一年だったという気はします。

だから、最初から言えることじゃあないと思うんですよね。最初から、自分の輪郭のようなものが見定められるものではなく、どの程度のことが自分で見定めるときにはじめて、周りの人たちとジグソーパズルのように有機的に結びついていけるのかな、と。

技術におぼれないために

最後に、じゃあいったい技術になにができるのかという問題に戻りたいと思います。技術っていうのは、さきほどの優先順位で言えば、優先順位の従属するほうですよね。そのときの主体の意識の持ちようによって、どういう技術になるのかが決まってくるわけです。

ユニバーサルデザインの考え方のなかに、さまざまな問題を技術によって解決しようという姿勢があるとすれば、技術になにがどこまでできるのかということを考える前に、その技術の背後にある優先順位なり意図が何なのかということ、一旦、問うていくことが必要だと思います。たとえばあらゆる人が同じスタートラインにたつための技術であつたとしたら、それは違うかな、と。

技術とは一色ではありません。その背後に、意図や優先順位が控えています。たとえば極端な話で言うと、その技術を追い求めている人が、他の人と同じような体や状態になりたいというための技術なのか、どこを目指しているのか、その人に対してなにを期待しているのかというところを踏まえたうえで、その技術を見ることが必要です。

もし人並みにやらせるための技術、障害者の人に対して、健常者並みに働いて、そのように生活するための技術であるとするならば、それは人によりけりで微妙なところもあると思いますが、もしユニバーサルデザインにして、ユニバーサルデザインにしてやったから対等なんだと、みんな均質化したんだから、だから甘えるなというようなメッセージ性がそこにあふれていたり、あるいはそのような考えを周りの人々が抱くようになったら、それはまずい。

もうちょっと謙虚に、ちょっとでも楽になれば、くらいの姿勢でいてほしいと思います。たとえば職場とかで耳の聞こえない人がいたときに、情報をどうするかというのは、

いろいろなところで出てくる問題だと思います。その際、もっともスムーズなのは、周りがその人にちょっと気をかけるとのことだと思うんですね。ユニバーサルデザインとして、職場に掲示板を設けて、重要な告知はそこですとか、そういうこともできると思います。ただそれは決して、それをしてやったからもういいだろう、ということじゃあないと思います。周りが常に特性を理解してあげるということが大切です。

重要なのは、技術に振り回されることなく、本当に大切なのはなにかということ、そして優先順位のありかたをきちんと考えていくなかで、技術とうまくつきあっていくことなのだと思います。 【了】

(聞き手 = 中村征樹)

会費納入について

このニューズレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。例えば、

「02,03 未」と「03 未」は、それぞれ該当年の会費（3500 円）が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後 Newsletter の発送を中止します。

「03 不足」は、お支払いいただいている会費が 3500 円には不足しているもので、「不足」の後の数字が不足金額を表わします。お手数ですが差額分お支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由で STS Network Japan に関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常 1 年間ですので、送付が始まって 1 年以内に入会の手続きをとられなければ、以後 Newsletter の送付を停止させていただきます。

会費は以下の口座にお振込みください。

郵便振替口座 00170-1-63708
加入者名 STS NETWORK JAPAN
(年会費 3,500 円)

なお、振込用紙の通信欄に以下の点を明記してください。

(1) 何年度会費（新規入会の方はそうお書きください）、(2) お名前、(3) ご所属、(4) ご連絡先（住所・電話番号・e-mail）

※新規入会のかたの会費は当該年度のものとして扱わせていただき、何月の入会であれその年のニューズレター全 4 号ぶんと、シンポジウム報告集が送付されます。

Technology of the Body

Rita Kuhlmann (ビーレフェルト大学)

以下に掲載したエッセイは、昨年夏に来日されたリタ・クールマン (Rita Kuhlmann) さんに寄稿していただいたものです。リタさんは JSPS サマープログラムを利用して東工大の中島研究室に2ヶ月余り滞在されました。彼女はドイツのビーレフェルト大学 (Universitat Bielefeld) で社会学を専攻し、ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann) の研究室でシステム理論を研究したこともあると聞いています。現在はビーレフェルト大学大学院で学位論文を執筆中です。

以下のエッセイにあるように、リタさんの研究テーマは「身体の技術」です。特に、美容整形やエステ、フィットネスなどの身体を変える技術と社会との相互作用を解明しようとしています。今回来日された背景には、「身体の技術」と社会の関わり方が日本とドイツでは異なるのではないか、という問題意識がありました。日本における「身体の技術」と社会の相互作用を分析・調査し、ドイツの場合と比較検討することによって、研究テーマを掘り下げようというわけです。滞在中は、橋爪大三郎などの研究者とディスカッションする一方、美容整形外科やエステ、フィットネス・クラブにインタビューに出向いていました。

私が理解した限り、「身体の技術」の発達には社会に重大な影響を与えることになりそうです。「身体の技術」が発達することによって、人々は自分の欲望のままに身体を変えようと考えようになりつつあります。その一方、この技術を利用できる人々はごく一部に限られると思われます。つまり、この技術を利用できるか否かによる新たな格差が生まれようとしているのです。このように、「身体の技術」は STS 的に大変興味深い問題を内包していると思われます。(事務局・野沢聡)

Today our body is becoming more and more something we can decide about! In former days our body was something given - something given by God or by nature. The individuals had to cope with their personal bodies and the society had a cultural system to handle the body itself. But this situation is now dramatically changing: New body technologies - for example cosmetic surgery - make it possible to redesign our given body and to look younger and more perfectly like the beauties we are watching on TV every day.

On the one side these new body technologies make it possible that everybody can improve the natural limits of the body - for many people a great new way of self-determination. But on the other hand the fact of the existence of these technologies brings everybody into a great decision-dilemma. No matter if they use it or not - everybody has to take the full responsibility for this decision - in his own eyes and in the eyes of

the whole society.

And with the emergence of this new situation it is now very interesting how the society will react to it. What does the possibility to redesign the body mean to the individuals - what does it mean to the different social classes? Did every local culture assimilate towards this new phenomenon in the same way? And how is the impact of the Western media towards the manipulation of the body?

In my research I analyse all these different effects of these new body technologies towards the German society. Based on the identity-theory of the German sociologist Ulrich Beck - who says that in the highly industrialized societies with rising rates of unemployment and divorce since the late 80's the development of a stable identity is becoming a big problem. In my research I try to show that - when these classical dimensions of identity are

becoming fragile - the design of someones own body now becomes the preferred new dimension for the personal identity-management in the Western societies.

But the use of the new body technologies is not any longer a single Western phenomen at all. Cosmetic surgery is now booming throughout Asia like never before. For an international comparison study I went to Japan and stayed at the Tokyo Institute of Technology. I tried to find out how a non-christian, non- individualistic society with a high economic power and a great Western orientation is reacting towards these new technologies. With the great help of Professor Hideto NAKAJIMA I found experts, working on the field of new body technologies, and sociologist for some qualitative interviews about the actual situation in Japan.

My results are that Japanese people also use the new body technologies for their identity-management like people in Western societies. But there is an important difference. Whereas you can find comsumers for a body-improvement from 16 to 60 in the Western culture - the average age of comsumers in Japan is almost under 20. And this is exactly the generation which is now confronted with the new identity-problem because of the new situation of unemployment and broken family structures in Japan.

And there is also a big difference in using these body technologies. Because Japan has a traditionally collective social structure and could be described as a middle mass society people only want to improve there body in a very soft way. They want to be "an ordinary beauty" - but not an "exceptional beauty". They don't use these technologies in a social distinctive way (Bourdieu) which is typical for very class differentiated societies like France or the USA.

This highly group-orientation and very collective mentality of the Japanese people is also

a big protection against the impact of the Western film and media industry. Whereas in Korea for example the women want to look like Western women -in Japan the people are still orientated towards a Japanese ideal of beauty and don't want to copy the Western style.

But we have to mention that - because a lot of Japanes TV-stars have done cosmetic surgery (bigger eyes, longer nose) - the Japanese ideal developes into a more Caucasian style.

This research was a first step on the way to understand the new status of the body today. I hope in the future there will be more research in Asia to escape the narrow Western perspective.

STSNJ メーリングリスト のお知らせ

STSNJ Network Japan では、会員のみ参加いただける STSNJ メーリングリストをご用意しています。

情報交換や議論に、幅広くご利用ください。

登録を希望されるかたは、事前に登録してあるアドレスで、お名前、ご所属、登録するメールアドレスを明記して、事務局 <office@stsnj.org> までメールをお送りください。会員の方であるか確認ののち、手動で登録いたします（しばらくお時間をいただくこともあります）。

また、登録メールアドレスの変更は事務局 <office@stsnj.org> までお願いいたします。

●編集委員からのお願い●

会員の皆様には、各種情報、エッセーや書評、書籍紹介など、をお寄せくださるようお願いいたします。特に、会員の皆様の関わられた出版物、報告書の情報をお知らせください。また、会員消息の項目も充実させたいと思っておりますので、お知らせください。今回も多数の方々から情報を提供していただきました。ご協力どうも有り難うございました。

なお、情報は、事務局 <office@stsnj.org>宛あるいは

skasuga@mars.dti.ne.jp

までお送りくださいますようお願い申し上げます。

<編集委員・春日 匠>

モード論の隠れた社会的機能：その1

木原英逸 (国士舘大学政経学部)

kihara@kokushikan.ac.jp

「伝統的でなじみのある知識生産の方法と並んで、新しい知識生産の方法が登場しつつある」と謳って、M. ギボンズらがそのマニフェストの書 *The new production of knowledge*, 1994 を発表してから10年が経つ。しかし、そこで導入された「モード2」という概念、つまり、新しいとされる知識生産(と消費)の様式は、それ自体が曖昧な概念である。そして、曖昧な概念は、いつでも、それを利用する者に都合のいい解釈を許してきた。

事実、冷戦終結に伴い、当時、科学政策においても軍民転換、プライバタイゼーションを必要としていた科学行政家たちが、この「モード2」という概念を、科学研究活動を市場・産業志向へと転換するその政策の正当化に利用したのはその一例である。

本稿では、「モード2」概念がいかに曖昧なものであるかを、上書の主に序章の記述の細部に立ち入って検討する。低い分解能のレンズでは、曖昧なものも輪郭を持って見えてしまう。ゆえに、高い分解能を持った分析が必要だからである。

以下、[xx] は、邦訳『現代社会と知の創造 モード論とは何か』1997での、まえがき、序章の該当頁を示す。

何が重要な問題か、何がよい科学(解決)を構成するのか、誰が科学に参加してもよいのかなど、そうした認知的、社会的規範の集合体を、知識生産のモードと言っているのであるが、この点で新しい、モード2をもった一群の知識生産活動が出現しつつあることを示す経験的証拠があるとし[22-23]、その上で、モード2のそうした新たな認知的、社会的規範を条件付けているのは、アプリケーションのコンテキストだとするのが[26]、この書の骨格的主張である。

要するに、アプリケーションのコンテキストで行われる知識生産活動が拡大しつつあり、そのコンテキストの中で、知識生産活動を導く諸規範を変容させて課題解決を果たそうとする。そのとき、こうして変容された新たな諸規範に、当の知識生産活動に参加するアクター間での合意が得られれば、そこにモード2の知識生産活動が出現するという話である[13,19]。

このように、「モード2」は「アプリケーションのコンテ

クスト」のあり方に条件付けられながら、そこに出現してくるという関係にある。であれば、明らかにすべきは、アプリケーションのコンテキストとはどのようなものか、である。ところが、モード1/2の区別を含め、所謂モード論の主張の根本を支えているはずのこの「アプリケーションのコンテキスト」という概念が極めて曖昧なのである。

アプリケーションのコンテキストでは、知識生産は、初めから、社会の(誰であれ)誰かにとって役立つことを意図して行われる。目的志向だというのである。加えて、その目的の設定と実行は、常に関係するアクター間の継続的な交渉の下で行われ、そこに多様なアクターの利害が含まれない内は、知識生産は行われない。目的に関する意思決定は「民主的」だというのである[24-25]。ただし、「民主的」とは言っても、ここで意味されていることは、多様な利害(関係者)に開かれていること、それ以上でも以下でもない。従って、例えば、知識生産活動の(おそらく民主的な)市場化もそれに含まれる[25]。市場もまた、そこに参加するアクター間の継続的な利害交渉の場であるからである。しかしいづれにせよ、こうして、アプリケーションのコンテキストを、民主的に意思決定された社会目的を志向して知識生産が行われるコンテキストだと規定するだけでは、実はほとんど何も規定していないに等しい。

なぜなら、社会の中のアクター間、例えば、官産学民セクター間での知識追求目的、その利害は当然ながら異なっている。どのアクターの目的をどの程度の重みで考慮するかによって、個々のアプリケーション・コンテキストは別の異なるものとなる。そして、どのアクターの目的をどの程度考慮するかは、権力・社会関係の中で決まってくる以上、個々のアプリケーション・コンテキストは、そもそもが、権力・社会関係の中で構築されたものである。にもかかわらず、社会の中のどのアクターの目的をどの程度重く考慮するかの規定は、アプリケーション・コンテキストの意味には含まれていない。

多様なアクターの利害を十分に含むよう、アクター間の継続的な交渉の下で知識追求目的は設定され遂行されるという規定、私が「民主的」と名づけた規定が、それに当たるように見えるかもしれない。しかし、現実の権力関係の中では、知識追求目的の決定に参加できる諸アクターの範囲にすでに偏りがあり、しかも、参加できる諸アクター

間にも力の非対称がある。したがって、こうした社会構造、権力構造を十分視野に入れず、民主的な意思決定を形式的に捉えて終わるならば、結果として、アプリケーション・コンテキストとは、力をもつアクターの目的が重みを持って考慮され、それを社会目的として志向し知識生産が行われるコンテキストだとなるだろう。そして、そうしたコンテキストの中で問題解決に相応しい認知的、社会的規範を備えるよう変容した知識生産活動がモード2だとなるだろう。

そして、モード論においては、民主的な意思決定の理解は、形式的に終わっている。社会構造、権力構造を十分に視野に入れた理解がそこには見られないからである。また、それは当然の帰結でもある。アプリケーションのコンテキストで行われる知識生産活動が拡大しつつある、そうした知識生産方法への変化の傾向・トレンドが事実あるとした上で、しかし、こうしたトレンドの価値、つまり、それが推奨さるべきものか、抗すべきものかについては判断しない [19]、とするモード論の出発点から導かれる当然の帰結なのである。

なぜなら、知識生産活動において志向される社会的目的的决定が「民主的」に行われるというその意味をより強く実質的にとり、多様なアクターの利害が「十分に」考慮されることをより求めれば、それだけ、アプリケーションのコンテキストもそこでのモード2の知識生産活動も、はたしてそれが拡大しているのか疑わしいものとなるだろう。しかし、モード論は、アプリケーションのコンテキストとモード2の知識生産活動が拡大しつつある傾向は現に見られる「事実」だとしてそこから出発する [23]。これは、モード論が、民主的な意思決定を比較的緩く弱い意味でとっていることを示している。しかも、この緩く理解されたアプリケーションのコンテキストとモード2の知識生産活動について、それが拡大していくことを促すべきか抑えるべきかの価値判断はしないと、事実判断にとどまることを主張する [19]。しかし、実は、このことで、モード論は、民主的な意思決定をより強くとっていく途を選ばず、弱くとることに止まりそれを許容するという自らの価値判断を再強化しているのである。「民主的」の意味をより強くとるならば、現に見られるアプリケーションのコンテキストとモード2の知識生産活動の拡大傾向の中には、その名に値しないものも含まれることになり、その進むべき途を是正すべきとの価値判断に至らざるを得なくなるからである。

こうして、モード論においては、民主的な意思決定の理解はより緩く、形式的なところで、現状追認のまま止まっ

ている。そのため、モード論が言うアプリケーションのコンテキストで知識生産が志向する社会的目的には、千の差があり、したがって、アプリケーションのコンテキストに応じて諸規範を変容させて出現するモード2の知識生産活動のあり方にも万の別がある。依然として、社会における権力、資源、機会の偏りを維持し強める「社会的目的」を志向して知識生産が行われるコンテキストも、偏りを弱めることを志向して行われるコンテキストも、そこでは等しく「アプリケーションのコンテキスト」であり、出現する知識生産はいずれも「モード2」なのである。そして、行くべき途は示されない。

以上要するに、モード論が言うアプリケーションのコンテキストの意味には、これだけの幅があり、ゆえに、その概念は曖昧なのである。そして、アプリケーションのコンテキストの中で、知識生産活動を導く諸規範を変容させて課題解決を果たそうとして出現してくるのが、モード2の知識生産活動である以上、「アプリケーションのコンテキスト」という概念の曖昧さは、「モード2」という概念を曖昧にする。

アプリケーションのコンテキストは、望ましい社会的目的も望ましくない社会的目的も含むコンテキストなのであり、そうした社会的目的を志向して行われるモード2の知識生産にも、望ましいもの望ましくないものが含まれている。

にもかかわらず、モード論は、モード2の知識生産活動の出現は意味深く、なぜなら、大学であれ、政府研究機関、企業研究所であれ、従来からある知識生産の組織が適切なものかという疑問を投げかけるからだと主張する [20]。モード2とそれを招来するコンテキストの変化は「事実」であるから価値を判断せずにそれは受け入れるとした上で、そうした事実に各組織形態が「適切に」応じることを促す。これは、まったくもって現状追従に他ならない。

曖昧で、きわめて広い解釈を許すモード2の知識生産様式、にもかかわらず、そうした「新たな」知識生産様式が円滑に進むよう、大学、政府研究機関、企業研究所を問わず、各組織形態の変更を求めるモード論の主張は、その現状追従、社会批判の欠如の結果として、力をもつアクターの目的を「社会」目的として志向し、それに相応しい諸規範を備えるよう変容した知識生産活動への適応を求める議論となるだろう。

確かに、モード論の核心には、アプリケーションのコンテキストでは民主的に意思決定された社会目的を志向して知識生産が行われるとの主張がある。しかし、それは実

質を欠く。そのため、むしろ、現状追従へ途を開くための目くらましとして機能している(例えば、モード論が言うように、アプリケーションのコンテキストが民主的市場化だとしても、その「民主的」に実質がなければ、実際のところは、それは知識生産に市場化の負の面を持ち込んでいることである)。多くの善意の論者がモード論に惹かれた理由がここにある。しかし、もう目を覚ますときである。

曖昧な概念は多様な解釈を許すから、「モード2」概念もいろいろな顔を見せる。本稿が的外れでないことを示すには、「モード2」が見せるそうした様々な仮の姿の正体を明らかにする作業が、もう少し必要だろう。また、前著を受けてM. ギボンズらが再び著した Re-Thinking Science, 2001 は、民主的に決定された「社会」目的というモード論の主張に今度は実質を与えることができたのだろうか。この点も含めて、改めて検討してみたい。【了】

<庶務(名簿担当)からのお願い>

お引越、ご所属の変更、ご結婚、区画整理などで、ニューズレターのお届け先が変わる方は、変更前と後の郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、電話番号、e-mail アドレスを事務局あてに、郵送か Fax, e-mail<office@stsnj.org>にてお知らせください。また、STSNJ の WebSite(<http://stsnj.org/cgi-bin/application/>)において、会員情報の変更を行うこともできます。

住所変更の手続きを行っていない方が多く、たくさんのニューズレターが事務局あてに返送されています。

●●研究会情報●●

◆第33回「湘南科学史懇話会」

演題： 二宮尊徳の仕法とその哲学

講師：稲葉 守さん(富士経済顧問)

日時：5月2(日)13:00～18:00

場所：財団法人藤沢産業振興財団(藤沢産業センター)

〒251-0052 藤沢市藤沢109番6号 湘南NDビル 8階。

ミーティングルーム特別

小田急線・JR 藤沢駅、徒歩5分 電話 046-621-3811

費用：1000円

幹事：猪野修治(代表) 廣政直彦、竹中英俊、加納 誠
連絡先(事務局)：猪野修治(〒242-0023 神奈川県大和市渋谷3-4-1)

TEL: 046-269-8210 FAX: 046-269-8213

e-mail: shujiino@js6.so-net.ne.jp

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/shonan/home.htm>

■終了後、湘南の風光明媚なところで懇親会(自由参加)を実施します。

■不定期に湘南科学史懇話会通信(現在、第10号既刊)を出しています。

■郵便振替：00270-3-44823 湘南科学史懇話会

講演概要

二宮尊徳の時代は有名な天保の改革の時代である。当時この国は既に商品経済の強力な作用下に否応なく資本主義への道へ入りつつあった。けれども幕府と各藩は封建制度を維持したままこの新条件に対応しようとしていたため、対応に正鵠を欠き、事態に立ち後れるばかりであった。かくして国民諸階層は上からの悪政と下から突き上げの双方からの圧力の狭間で二重の苦しみを味わわなければならなかった。かかる条件下に特に農村においては農民層分解が進み、重課税による施策は農民を一層零落させ、貧窮者を生産せずにはいかなかった。こうした条件下に農村生活は嫌でも分解の運命に突き当たっていた。資本主義への道を選択するか、それともそれを上から押さえ込む幕藩体制を受容する道を選択するかである。しかしながらこのいずれの道の選択も農民の自由になるもの

ではなかった。職業選択の自由は勿論のこと、農村から離れることさえも許されてはいなかったのである。しかも支配階級である武士階級は以前にもまして農民から高額
の租税を徴収していた。こうした条件の悪化がこの時代の危機を激成した。世に言う天保の改革の時代とは農村における深刻な危機の時代をいうのである。それは都市部における華やかな繁栄を支えていた実体的基礎であった。

二宮尊徳はこうした時代に相州小田原の近郷の農村に生まれ、そこで成人し、後に農政家として名を成した人物である。彼の幼少期のエピソードの幾つかは有名である。薪を背負って本を読んだとか、菜種を蒔いて勉強用の灯油を手に入れたとか、酒匂川の土手を直す人々に自分の編んだ草鞋を無償で提供したとか、その種の話は有名である。しかしながらこの国の多くの人々は、二宮尊徳の業績について、幼年期のこうしたエピソード以上のことはほとんど知らない。ましてや彼の行った仕法（農村立て直し）の本質とか（それは分度にある）、その基礎にある尊徳の自然哲学とかいったことは全く知らない。それらを理解する手だてを全然持っていないように見える。浩瀚な三十六巻の全集も存在しているが、それらを読み解く方法も案内もなきに等しい。それは皇国史観によってこれまでの尊徳像が歪められてきたからであり、それが訂正されていないためである。それを訂正するために必要な尊徳の膨大な日記と書簡を研究した本もないし、ましてや尊徳仕法を宋学や日本儒教との関係から尋ねた研究書もまだ存在していないようである。

しかしながら天保の諸改革中でただ一つ尊徳仕法のみが成功した農村改革であったという事実は刮目に値するであろう。尊徳仕法は科学的である。それは人をして尊徳仕法の秘密解明へと駆り立てる魅力を持つと思われる。それは教えることの多い、またすこぶる魅力に富むものである。ただしそれを知ろうと真剣に希求する者にとってはという限定がつく。

今日われわれが経験しつつある未曾有の経済危機は尊徳仕法を真に明るみに出す条件を持っている。尊徳仕法を研究して、それを経営に、また学業に、また交際に、広くそれを応用すべきであるが、それを実行する者はまだ出ていない。それはこれまでの尊徳像が誤った方法で描かれてきた結果である。忠君愛国者とは似ても似つかぬ彼の封建制に対する隠れた変革者としての一面を知らないからである。尊徳は意図的に自分の本領を隠し通して生き抜いた。彼の直弟子達も先生の本領を洞察した者はいない。今日においてもそれは変わらない。報徳思想を語

る者は利用者が多い。こうした事情によって二宮尊徳の仕法の本質（それは分度によって為政者である武士階級に譲歩を迫り、農村全体を立て直す施策であったが）、これは知られず、直弟子の世代から明治・大正・昭和の報徳運動の全時代を通して今日まで尊徳はずっと誤解され続けてきたと言えるのである。今日においては忠君愛国者としての二宮尊徳像を取り払い、隠れた封建制度変革者としての二宮尊徳を明るみに出さなければならない。それが、わが書簡と日記を看よ、と遺言した尊徳を読む者の仕事である。

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/shonan/home.htm>

◆第 39 回「科学技術社会論研究会」ワークショップ

「産学連携政策の行方を問う

—大学の社会的機能を中心として：その2—

5月22日（土）10:00-18:00

会場：東京大学先端科学技術研究センター 13 号館 109 号室

話題提供者：

桑原雅子・後藤邦夫（NPO 法人 / 学術研究ネット）

「知識社会における大学の役割」

西村吉雄（大阪大学）

「いまなぜ産学連携か：

企業の研究開発の視点から」

三宅満紀子（麗澤大学）

「大学の教育的機能から見る産学連携：

産業界の求める大学における

情報教育に関する調査より」

澤田芳郎（京都大学）

「大学モデルと産学連携：

日本の産学連携史のなかで」

宮田由紀夫（大阪府立大学）

「産業政策としての産学連携：

アメリカに見る可能性と限界」

レスポンス：永田晃也（九州大学）

総合討議・司会：澤田芳郎（京都大学）

・なお、事前に参加登録が必要です。参加をご希望の方は、事務局・中村までご連絡ください。

事務局：木原英逸（国士舘大学）

中村征樹（東京大学・受付担当）

nakamura.masaki@nifty.ne.jp

◆第 161 回 「科学と社会を考える土曜講座」

5 月 22 日 (土)

「医療現場でのアートの試み」

大阪市立大学医学部附属病院小児科病棟

プロジェクト 2003「アートもクスリ」の実践から

会場：文京区茗台生涯学習館

講師：

ゴウヤスノリ (ワークショップ・プランナー)

飯田紀子 (いいだのりこ、美術家)

山口悦子 (やまぐちえつこ、小児科医)

内容：

一般に病院という場や入院患児の日常は、単なる治療の場であるとか異空間・非日常的な空間としてネガティブに捉えられがちです。しかし、近年、彼らにとってそこはむしろ“一つの地域(まち)”であり“生活の場”であると考えられるようになってきました。

本プロジェクトでは、長期入院難治性疾患患児たちの日常に、アートプログラムを導入し、アートの視点によって医療現場に対するネガティブな先入観を取り除き、入院環境(生活の場)における楽しみや喜びを捉え直すことを試みました。また、多くの人との「協働」によるプログラムの実施を通じ、患児らのクオリティー・オブ・ライフ(生活の質)を高め、健全な心身の育成を援助することを目指しました。さらに、市民に向け、アートプログラムの成果を展示公開し、病院と市民との結びつきを築き、病気や障害を持つ子ども達が社会に受け入れられていく過程を支援していこうと考えました。

本講座では、プロジェクトの企画者による具体的な内容・様子、そして医療の現場にアートの導入を考案し実践してきた医師の生の声をお伝えしたいと思います。合い言葉は、「入院してもうかった!!」。

本プロジェクトの詳細

<http://home.p05.itscom.net/all>

◆化学史学会年会シンポジウム

「科学技術と倫理： 科学史のコントリビューション」

6 月 20 日 (日) 13:30 ~ 16:30

会場：東京海洋大学 海洋科学部 品川キャンパス 講義

座長：柿原泰 (東京海洋大学)

パネラー：

横山輝雄 (南山大学) 「科学倫理と技術倫理」

菊地重秋 (芝浦工業大学) 「技術者倫理の歴史的背景」

日本化学会会員行動規範の制定過程にも触れて」

杉山滋郎 (北海道大学) 「「水俣病事件」に何を学ぶか」

林真理 (工学院大学)

「歴史からアプローチする生命倫理」

コメンテーター： 古谷圭一 (恵泉女学園大学)

小松美彦 (東京海洋大学)

情報は、

<http://members.jcom.home.ne.jp/kagakushi/2004Program.html>

参照してください。



編集後記

- ・お届けするのが遅くなりましたが、本号は 2003 年度最終号です。
(2003 年度の会計報告などは次号掲載となります)
- ・ご要望を受けまして、若干、フォントなどを大きめにしてみました、いかがでしょうか？
ご感想などをお寄せください。
- ・それと、この号から編集ソフトを InDesign に変更してみました。
まだ直感的に操作ができず四苦八苦です。

Newsletter Vol.14, No.4

(通巻 No.53)

2004 年 03 月 31 日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局

Newsletter 編集委員会

代表 重松 真由美／委員 春日 匠

発行

STS NETWORK JAPAN

代表 重松 真由美

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科

広域科学専攻広域システム科学系

藤垣裕子研究室気付

FAX:03-5454-6990

E-mail: office@stsnj.org

WebSite: <http://stsnj.org/>

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN

(年会費 3,500 円)